

人間発達研究所通信

1998年9月3日学術刊行物認可第430号
ISSN 0913-7092

Vol.28(1)
人間発達研究所

大津市朝日が丘 1-4-39
梅田ビル3F
Phone/Fax 077-524-9387

発達保障論誕生50年連続学習会第2回 話し手 平田棟治さん 発達保障論誕生の頃 若者が手をつないで

1. 平田棟治さんのこと

第2回の今回、インタビューをお願いした平田棟治さんは1935年5月6日生まれ、滋賀大学を卒業後、1960(昭和35)年から1969(昭和44)年まで近江学園に教員として勤務しておられた。ちょうど発達保障論が登場した時期から糸賀一雄園長が亡くなる頃までを近江学園とともに歩んでおられたことになる。

近江学園で後輩だった田中邦子さんは、平田さんについて「色が黒くて声がかく、いつも堂々として、見るからに頼もしい」(滋賀民報 2008年7月6日付「私の交友録」欄)と紹介しておられ

る。別名「平田ホエールズ」とも呼ばれていた。実践上ゆるがせにできないこと、大事なことを平田さんは大きな声で発言する、そんな姿を身近な人たちは、「吠える」、「ホエールズ」とあだ名していたらしい(その頃、「大洋ホエールズ」というプロ野球の球団があった)。

2. 土曜会の誕生は若者が中心に

さて平田さんは滋賀大学教育学部を卒業する。学生時代から、地域に目を向けた無着成恭の実践にあこがれ、また教育科学研究会などにも参加をするなど積極的な学生だったが、大学から数キロの場所に当時あった近江学園との接点はなく、

CONTENTS

発達保障論誕生50年第2回 発達保障論誕生の頃 話し手：平田棟治さん	1
会員のページ	
ロシア・モスクワの障害児教育を訪ねて(上) 荒木美知子	4
連載エッセイ「共そだち」第1回 山本翔太	10
事務局だより	11

たまたま紹介をされて近江学園にあった南郷小学校・南郷中学校の分校の教員として、1960年の9月に採用をされた。

ちょうどその時期に、近江学園の若手職員有志によって呼びかけられた土曜会の準備の話し合いがなされていた。採用前後のことなので、いわば第三者の眼でその経過をみることになる。土曜会の背景として、平田さんは、1950年代の後半以降、近江学園を基盤にして新しい施設づくりが展開され、それにともないベテラン職員がそこに転出することが必要になり、それにとまなう体制上の変更が続いていた。こうした体制上の揺れの中で、子どもが施設からふらふら出て行くなど、運営上の問題がいくつか生じていた。また、子どもの事故などが起きる中で、児童管理のあり方も強調され、各クラスが「学級王国」的な雰囲気も強まっていた（例えば、田中昌人『発達保障への道 2』1974のあとがき）。また、実践的には「ハイ・ニコ・ボン」というような子どもの姿を求める「訓練ベースの適応主義的な」指導の姿勢も強まる中で、そのことに「展望を持たない若手の戸惑い」があった。そうした若手が、クラスの垣根を取り払って、子どもや指導のあり方を自由に議論しようという期待も強かった、という。

3. 発達への注目

1960年の末から渡欧していた糸賀園長は発足した土曜会に途中から参加をした。当時、国際的には、知能指数で操作

的に定義され、劣弱性を列挙する形でその特性を記述されていた「精神薄弱」概念の見直しが意識され始めていた（ちなみに、アメリカでは1961年にヘバーによって精神薄弱にかわる概念として適応を指標に精神遅滞が提起をされた時期）。そうした動向も糸賀から報告をされ、知能指数（IQ）で子どもをみず精神年齢（MA）で見よう、あるいは「発達の壁」を意識してみてもどうか、などの提案もあった。

学園内で、若手有志の呼びかけで始まった土曜会の内容が、次第に期待と共感を広げていくことになるが、そこにどのような魅力があったのだろうか。

その理由の一つに、発達的に見る、という観点の意味があった、と平田さんは指摘する。「知能指数ではなく精神年齢でみることによって指導の展望を持ちやすかったと思う。例えば、自分が担当する子どもの姿をお互いに重ね合わせながら議論を広げることができた」。田中昌人も、この土曜会で発達段階の説明などもし、それをふまえて、「節目の手前が難しく時間がかかる」「そこでの取り組みが画一的になると常同行動化する」など、時期の特徴だけではなく、異なる発達の時期であっても発達の機制・仕組みにかかわる普遍的な特徴にも気づくことができ、その意味でもクラスの垣根を越えた一步深い議論も可能になったそうである。発達的に見ることを通して、職員同士がその実践の意味においてつなぎ直される契機になったということが出来るかもしれない。

4. 仲間づくり

就職二年目の1961年に一歳半頃の発達の節目前後にいる子どもたちが中心の第1教育部に配属されその責任者になった平田さんは、「まず身体を使う」ことを軸に実践を組み立てようとした。具体的には散歩で、南郷にある近江学園から瀬田の唐橋への往復(7~8キロくらい)などに取り組んだ。ただ、その際に子ども同士の関係をどうつくるかに配慮し、例えば列の前の人を意識できるようにするため、名前呼びを丁寧に、など工夫をした。また、後に担当した第3教育部では、そこでは小さい子どもへのいじめのあることへの働きかけを「力のある子どもの要求を育てる」方向に焦点化し、「スキーにいこう」という実践なども計画した。バスでいくために園生がカンパを募ろう、カンパをくださった方へのお土産にはスキーの経験の感想文を書こう。このことを通じて子どもたちは自分の要求を実現すると他の人の要求も意識できるようになったように見える。一人ひとりの課題に迫るためにも、集団を意識した展開を考える仲間づくりであった。

こうした実践は、近江学園の「自由な」雰囲気が大きく後押ししていた。当時糸賀園長は、職員一人ひとりの自由な発想や取り組みを尊重しようとし、さまざまな外部の研修などに参加することを積極的に勧めた。民間の教育研究会に職員が参加し、そこで学んできたリトミックや水道方式など新しい方法が現場に積

極的に紹介をされていた。一方で、糸賀園長は職員の記録する日誌に必ず丹念に目を通し、感想を書き入れるということを長年続けていた。「現場の取り組みは自由に、しかし園長としては無関心ではない」とでもいえようか。

自由と探究の雰囲気の中で、発達研究もまた深められていったといえるだろう。

5. 同時に社会も変えていこう

学習会当日、平田さんは数枚の年表を持参された。近江学園創立二十周年記念行事に掲示するための年表の原稿で、平田さんと田中昌人さんが担当して制作をしたものという。

年表の1959年から、「発達保障」ということばが用いられ始めた1961年には、「発達理解の観点を共通性の理解の中に求めて指導の科学化をめざす」と記述があり、そこに、「職員の権利の問題に取り組まなかったことの失敗」という補足が書き込まれている。

発達保障という概念を得ることが、単に障害の有無を超えての共通性だけではなく、職員・おとなの発達もまた保障する、という観点にもつながっていたことをうかがわせるものである。1960年代に入って生理休暇制度を実現するなど、近江学年内の労働組合の活動も本格化する。「発達保障」に込めた思いが照射している領域の広さの一端を垣間見た思いがした。

(この第2回学習会は、2011年12月10日に開催しました。文責：中村隆一)

ロシア・モスクワの障害児教育を訪ねて(上)

荒木美知子, 小西豊, 小西文子

1. はじめに

ロシア訪問調査は2012年2月26日から3月4日(現地滞在は2月27日から3月3日で見学は2日まで)であった。メンバーは小西豊(岐阜大学地域科学部)を代表として, 小西文子(大垣女子短期大学), 荒木美知子(大阪女子短期大学)であった。

今回の調査で訪れた施設は全てモスクワ市内にある。2月末のモスクワはまだ日中でもマイナスの気候であり, まだ市内のあちこちに雪が残っており, 公園には雪だるまが鎮座していた。雪国では当たり前前の光景に, どの地でも同じことをするのだと妙に納得した。それに対して, 室内は大変暖かで, 子どもたちは薄着で過ごしていた。また, 移動手段はほとんどメトロであり, ホテルと施設の間を移動するだけの日々だったにもかかわらず, 朝のラッシュ時の通勤の様子など市民の生活を垣間見ることもできた。

今回のレポートでは, 最初に訪問した幼稚園や学校のそれぞれの特徴についてトピック的に紹介し, その後で課題を幾つか整理して報告する。ロシアの障害児教育の中で, ()乳幼児の障害の早期発見および対応, 課題等について, ()学

校教育制度と卒業後について簡単にまとめる(上)。その後(下), ()療育・教育内容について, ()寄宿制について, ()親の権利について, ()障害について, ()その他の課題などをまとめたいと考えている。ただし, いずれも極力今回見聞できたことからの範囲に限定したいと思う。5日間で, 一施設につき半日, だいたい3~4時間ほどの見学と意見交換を行うことができたが, 2つの研究機関と6つの施設を訪問できたのは代表者の小西先生の努力を初め, 現地の方の尽力によるところが大きい。とはいえ, まだ不明な点も多く, 当然ながら断定できないこともまた多だからである。同じものを見ても, どの角度から見るかでその評価が変わる点でも一つのレポートとしての報告である点をお断りしたい。

2. 訪問機関と施設

訪れた研究機関は1)ロシア科学アカデミー人口社会問題研究所(Институт социально-экономических проблем народонаселения РАН(ИСЭПН)), 2)ロシア教育アカデミー・連邦国立科学矯正教育研究所(Институт коррекционной педагогики Российской академии образования。)の2箇所である。主に対応して下さったのは, 前者がエレナ・

クラギナ主任研究所員（およびエレナ・アブラーモヴァ所長），後者はニコライ・マロフェエフ所長およびナタリア・バブキナ講師であった。

両研究施設から紹介されて訪問した施設は以下である。訪問順に列挙した。

発達障害児幼稚園 908 番，Детский сад № 908 для детей с задержкой психического развития）通園幼稚園，園長：エレナ・ドゥブニナ氏

教育センター第 1467 番（Центр образования № 1468）通常学校の特別学級，センター長：ナターリア・グシャリチナ氏

モスクワ市教育委員会管轄の東地区・第 47 幼稚園（Департамент образования города Москвы Восточное окружное управления образования ГОУ детский сад № 47 компенсирующего вида № 47），寄宿制幼稚園

第 102 特別（矯正）普通教育学校（寄宿制第 種）（Посещение Государственного образовательного учреждения специальной (коррекционной) общеобразовательной школы-интерната

вида № 102 Департамента образования города Москвы）ゲンナジー・ワセンコフ校長

第 68 特別（矯正）普通教育学校（寄宿制第 種）（ГОУ специальной (коррекционной) общеобразовательной школы-интерната вида № 68 Юго-Западного окружного управления Департамента образования города Москвы）イワノワ・ニーナ・ティホノブナ校長

治療教育センター（Посещение Центра лечебной педагогики）センター長；ピトヴァ・アンナ・リュボフナ氏

第一日目は両研究所を訪れた。挨拶とお礼，我々の研究目的等の説明を団長である小西豊が行い，その後，若干の意見交換を行った。矯正教育研究所は4日目の午後に再度訪問し，20名ほどの関係者を前にして，小西文子が音楽療法の意義と日本での実践について，荒木美知子が日本の乳幼児健診制度とその意義について、それぞれプレゼンテーションを行った。それらは，出発前からの申し合わせであった。

訪問施設は上記したように乳幼児期の2施設，学校関係が3施設，そして治療教育センター1箇所であった。

現在のロシア連邦・モスクワ市特別教育システムは，図 1^(注 1)にあるように，就学前教育は1歳から6，7歳まで，その後，基礎教育（1～4学年），初等教育（5～9年）中等教育（10～11学年）となっており，11年制義務教育が実施されている^(注 2)。この制度に照らすと我々は就学前施設2園，第 種^(注 3)の知的障害児学校を2校，通常の学校を1校訪問したことになる。

モスクワはロシアの首都であり，ロシアの中の最大都市である。したがって，モスクワの障害児教育システムや実践がそのまま全ロシアを代表することにはならず，モスクワ^(注 3)だからこそ可能なことも多い。モスクワ市と地方都市では様々な面での格差は数倍になるとも言わ

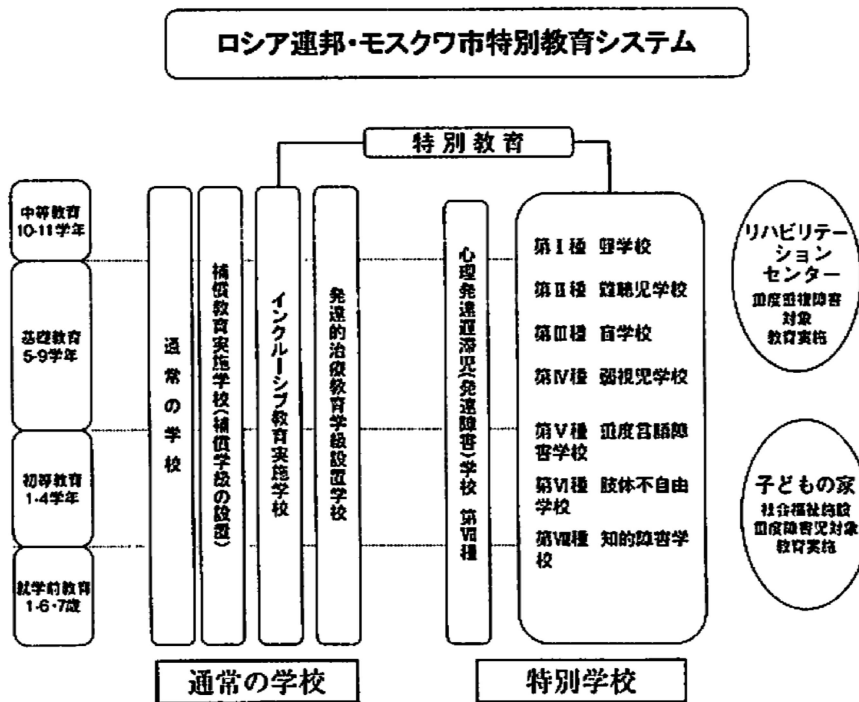


図1. ロシア連邦・モスクワ市の特別教育システム

(Назарова Н.М. под ред (2008) : Специальная педагогика. Том2. Общие основы Специальной педагогики. 及びロシア連邦特別教育法、モスクワ市視察をもとに著者作成)

れる。今回の訪問がモスクワ市に限っていることもあり、モスクワ市の障害児教育事情と理解する方が良いただろう。それを確認した上で、我々が見聞した限りでの障害児教育の現状と課題としてまとめたい。1991年にいわゆるソビエト連邦社会主義共和国は崩壊した。その遺産を継承しつつも新たな国として出発し、それぞれの部署において実践家たち（いずれも専門家集団として紹介された）が、障害児者にとって本当に必要なことは何

かを模索している様子が窺われた。

3. 訪問施設の概要

以下、簡単に訪問先の特徴を素描する。番号はそれぞれ上記施設を意味する。

1) 乳幼児期の施設 - および

1976年に開園し、1992年から障害児を受け入れ、1997年以降、現在の幼稚園（連邦国営幼稚園でミニリハビリテ

ーションセンターを有する)になった。ここは2歳から7歳までの子どもを対象としている。各年齢グループとプレスクールを持っている。園児数120名で、保育時間はだいたい2～3時間であるが、夕方まで保育する体制が整えられている。保育内容は一般教育と療育の二本立てである。

1983年に開園した矯正幼稚園(発達障害児)で在園児46人である。スタッフは30人おり、そのうちの20人は障害児の専門家、言語教育教師、保育者などの専門家であり、主に4つの各年齢グループでの保育を行っている。本来、各グループ12人なのだが、自閉症の増加により各グループ15、6人になっている。寄宿制の幼稚園であるために、一日24時間を通した保育ができるという特徴を持つ。

いずれも、2歳から就学前までの施設で、前者が通園で、後者は寄宿制である。グループでの療育を中心としつつも個別療育もある。また、プレスクールグループも有している。

2) 学校 - , および

児童数は500人弱で、他にプレスクール児が30人在籍。1年生は50人だが、転出入が著しいために正確な数が把握されていない。障害児の教育はこの通常学校の特別クラスでなされている。また、午後は特別ニーズ教育と称して子どもたちの様々な能力開発に力を入れている。障害児と一緒に様々な学習プログラムに参加しており、他に個別クラスや個別授業によってニーズに応じて対応している。

2000年から校長になったナターリア・グシャリチナ氏の方針で子どもたちに多彩な文化を経験させるなどを重視している。

現在の学校形態は1996年からだが、学校の歴史としてまもなく50年になるという。生徒数は約170人で、知的障害が中心だが、重複障害児も25人、身体障害児が80人おり、後者は脳性マヒと診断されている。小学部の4年生までは読み書きを中心とした通常教育であり、5年生以降になると労働的な授業も行われる。これ以降も普通学校と同じカリキュラムで授業を行っている。この学校では校長先生がとりわけ就労に向けての技術習得に力を入れており、その施設設備の見学や指導スタッフの獲得などについて説明を受ける。

この学校もと同じ第種の知的障害児のための学校で1968年に開校された。現在は知的障害児が30人で、自閉症の子もおり、全体に自閉症やダウン症が増加傾向にある。約170人在籍中80人ほどは身体障害児だが、これらの子はいずれその専門の学校に行く(図1参照)。この学校ではテニス準備教育に力を入れ、それを通じて子どもたちの能力開発を目指している。また、寄宿舎を見学したが、もともと障害児用のものではないが、部屋は十分な広さを持ち、清楚で良く整頓されている印象があった。

知的障害児学校は第種とされており、寄宿制である。小学部から11年生まである。ワークショップをもち、就労に向けての対応も視野に入れた教育をしてい

る。

3) 専門施設 -

最後の訪問施設は1989年、親と専門家の要求により開設された治療教育センターである。20年以上の歴史があり、すでに1万2千人以上が利用している。ロシアには寄宿制の施設が多いが、ここはサービスセンターとして設立された。通園者の多くは2～3回/週で、1回につき3～4時間のコースだが、30分コースから週1回や月1回のケースもある。土日も開設しているだけではなく、学齢児のフォローアップのためにイブニンググループも設けている。年間の利用者は定期的な人だけで230人だが、トータルには340人になる。自閉症が特に増える傾向にある。スタッフは70名弱だが、それ以外に多くのボランティアによって支えられている。我々を案内して下さった方も学校の教師を退職された方がボランティアで活動しているとのことだった。療育や相談、親へのアドバイスなど様々な活動を行っており、それ以外にも夏キャンプでは国外からの参加者も既に予定されている。重度障害で学校には入れなかった子がここで学び、成人になった今では特別な技術を得て製品製作に余念がない姿が印象的であった。

4. 乳幼児期における障害の発見や早期対応のシステムなど

訪問地で説明を受けた諸情報から乳幼児期の障害児対応システムについて簡単

にまとめる。障害の発見・対応については、まず親の気づきがあると、親は精神科医・言語障害関係者や医師、眼科医などを紹介され、そこで専門的な対応がされる。それをもとに（心理・医師による教育委員会でのコンサルテーション）で子どもの心理発達の検討を行い、その子にふさわしい療育の場（発達障害児の幼稚園など）が紹介される。その幼稚園とは我々が視察したような通園施設や寄宿制の園であり、そこで専門的な療育を受ける。そしてその結果をもとに就学前の円卓会議にて一人ひとりにより適切な学校教育の場が検討されるのである。このようなシステムが一応できている。その際、親にはその方針に対して納得できる対応を求める権利があり、それに基づいて当初の就学先が変更されることもあり得る。その意味では、親の意向が尊重される。

幼児期の障害児幼稚園での最も大きな課題の一つは、これらの子どもたちの就学先である。すなわち、なるべく多くの子どもが通常学校に行くことができるようにすることが幼児教育（ないし療育）の目標なのだ。例えば、の幼稚園でのパンフには大半の子どもは普通教育学校に行くことされている。実際、子どもたちの4割は通常学校へ、4割が第種の学校、残りの2割が言語聴覚学校に行くという。また、の治療教育センターは生後まもない子どもから利用できるが、ここでの目標も、幼児期の場合、通常幼稚園、通常学校へ行けるように準備すること、障害児の発達支援などが挙げられた。

さらに、子どもたちの能力を知的な面だけに限定するのではなく、その子の潜在的な能力を多面的な角度から発見するように努めることを強調していたことが印象的であった。

5. 学校教育とその後の進路など

学校教育については、図1にみるように障害種別の学校と通常学校の中の特別学級がある。我々が訪問したのは一校は普通学校の特別学級だったが、他の二校は第1種学校（寄宿制）であった。学校教育は18歳までが義務教育であるが、9年生になるとカレッジ（専門学校か、例えば縫製、ガーデニング、製本、印刷、木工などがある）への入学許可を得るためにテストを受ける資格を得る。学校教育では、基礎的な知識を習得しつつ、その後、労働教育への準備段階として位置づけられた初等教育、中等教育へと連なる内容を同じように学ぶ。ここでは社会人として必要な知識を得ることと同時に、その社会で生きていくための労働技術を得ることを重要な柱の一つとしている。

図2は、第1種学校のパンフから作成した。これらの諸学校でも最後に訪問した治療教育センターでも最も良く話題に上った。学校教育後にカレッジに行くことができるが、いずれにせよ、就労の場の確保が、学校教育後の大きな課題となっており、そのために関係者が奔走している様子が窺えた。

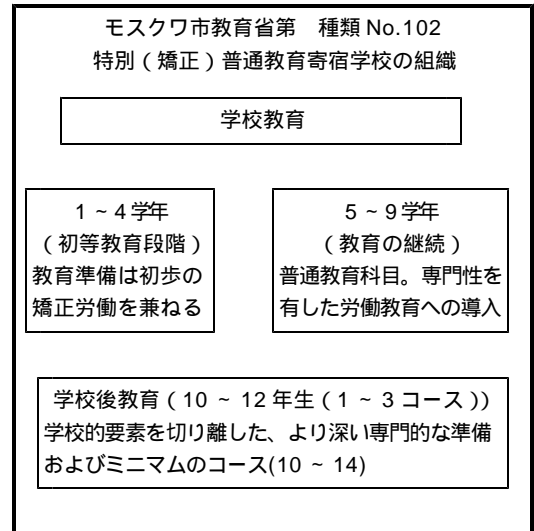


図2 第102学校の資料より

【注】

- 1) 図1の出典；渡邊健治「ロシアにおけるインクルーシブ教育について」SENジャーナル 17(1) 2011, pp.5-32. 渡邊によると、この制度は1997年に整備されたものである。
- 2) 同上、初等中等普通教育学校は2008年から11年制義務教育が実施されたとされている。
- 3) モスクワ市は人口1,150万の都市であり、都市としては世界第一の人口である(2010年現在)。

就学前教育について“Детский сад”を2箇所訪問したが、これを本稿では“幼稚園”と訳すこととする。

付記：本ロシア調査は、科学研究費補助金・基盤研究(A)「特別なニーズをもつ子どもへの教育・社会開発に関する比較研究」(課題番号23252010, 研究代表者・黒田学)に基づいて実施されたものである。



連載

「共そだち」第1回

社会福祉法人 桃郷

児童発達支援事業つくしんぼ園

発達相談員 山本翔太

私は2年間働いてきた京都を離れ、この4月より和歌山県の社会福祉法人桃郷へ就職することになりました。現在法人内の児童発達支援事業つくしんぼ園で発達相談員をしています。

社会福祉法人桃郷は、児童発達支援センターひまわり園をはじめとして、就学前の子どもたちから学童期までの子どもたちを対象に様々な事業をおこなっています。その中で、つくしんぼ園は、以前は保護者を中心に関係者たちによる運営委員会方式で運営されてきましたが、5年前から社会福祉法人桃郷が運営を引き受け、今日に至っています。現在は24名の子どもたちが在籍し、毎日通園・母子分離で療育・保育をおこなっています。

ひまわり園の実践については、両角正子先生が『すべての子どもに豊かな育ちを』（クリエイツかもがわ）で書かれています。つくしんぼ園においても同様の視点・想いをもって実践に取り組んでいます。近年障害をもつ子どもたちを対象とした様々な形式の療法・プログラムが開発されていますが、つくしんぼ園ではそのような特別な方法を取り入れるのではなく、「みんなといっしょに自分の力で、しっかり食べて、きちんと排泄し、ぐっすり眠る、そしていきいきとよく遊

ぶ」ということを大切にし、日々の“あたりまえ”の生活をくぐらせることで子どもたちの育ちを支えていけるよう実践に取り組んでいます。

ただ、つくしんぼ園には十分に整備された園舎は無く、地域の集会所をお借りして保育・療育をおこなっています。保育室は一つしかなく、トイレもおとな用であり、調理室は狭い湯沸室で調理をおこなっているなど、施設環境の面では子どもたちにとってもおとなたちにとっても、とても厳しい環境の中にあります。

それでも、どんなに施設環境が厳しくても、日々子どもたちの育ちを感じ、子どもたちの変化に驚かされています。今年度つくしんぼ園では新たに8名の子どもたちが加わり、保育が始まりました。4月の入園式の直後には、不安がいっばいで毎日泣きながら登園してきた新入園の子どもたち、昨年から継続して通っている子どもたちも、新たな仲間が加わったことや職員の人事異動などでまわりの様子の変化し、みんな緊張した様子がみられました。それでも、毎日の園生活を過ごしていく中で、1か月少し経った今はみんながとても楽しそうにいきいきと過ごしています。

そのような背景には、子どもたち自身の育ちもありますが、厳しい施設環境の中であっても子どもたちの育ちを保障していくために日々様々な工夫を凝らして実践をおこなっている職員の努力もあると感じています。

現在、福祉の現場はどこもとても厳しい状況にあると思います。しかし、どん

なに厳しい状況・環境にあっても、まずは子ども集団を十分に保障すること。そして、職員たちも集団となり意見を出し合うことで様々な工夫を重ねていき、また、家族とも協力しあって実践をすすめ

ていくことによって、子どもたちの育ちを豊かに保障していくことができるのだということを実感しています。

(やまもと しょうた)

寄贈本

(記入例) 著者名 発行年 表題・書名 発行所 寄贈者(著者と発行所が同じ場合は省略) 敬称略

全国幼年教育研究協議会, 2012, 幼年教育 No166 2011年度 Vol.2, 全国幼年教育研究協議会

シリーズ「大学評価を考える」編集委員会, 2005, 21世紀の教育・研究と大学評価 もう一つの大学評価宣言, 大学評価学会, 寄贈 渡部昭男

部落問題研究所, 2011, 部落問題解決過程の研究 第2巻 教育・思想文化篇, 部落問題研究所出版部, 寄贈 川端俊英

愛知県立大学生涯発達研究所, 2012, 地域連携による発達障がい児の支援 幼児期から高校まで, 愛知県立大学生涯発達研究所

高谷清, 2012, 「この子らを世の光に」現代に生きる系賀一雄の思想 高谷清講演記念誌, にやにゆによの会, 寄贈 高谷清 大阪健康福祉短期大学, 2012, 紀要『創発』 第11号, 大阪健康福祉短期大学

愛知県立大学生涯発達研究所, 2012, 生涯発達研究 第4号, 愛知県立大学生涯発達研究所

龍谷大学教育学会紀要編集委員会, 2012, 龍谷大学教育学会紀要 No.11, 龍谷大学教育

学会

立命館大学産業社会学会, 2012, 立命館産業社会論集 Vol.47 No. 4(通巻152巻), 立命館大学産業社会学会

日本体育大学紀要委員会, 2012, 日本体育大学紀要 Vol.41 No.2, 日本体育大学

ひとなる書房, 2012, 現代と保育 No.82, ひとなる書房

(4月末日まで)

これ以外に, 月刊誌『ゆたかなくらし』, 『福祉のひろば』を毎号寄贈して頂いています。

活動報告

3月2日, 16日, 23日 運営委員会

3日 発達診断方法論コース

4日 発達保障学校発達基礎理論研究コース公開集中講義

7日 田中テキスト勉強会 発達診断研究会

18日 個人の発達の系概論コース

24日 発達診断セミナー事務局

4月6日 田中テキスト勉強会

6日, 13日, 20日 運営委員会

5日 発達基礎理論研究コース 発達診断方法論コース

14日 紀要合評会

発達障害研究会

20日 発達診断研究会

22日 発達保障学校事前学習会&説明会
発達診断セミナー事務局

新規会員の方 到着順

高橋 沙織さん	東野 智さん
久保 遙さん	川上 須我さん
間宮 正幸さん	戸矢 隆彦さん
射水小夜子さん	前田 麻衣さん
本田 章子さん	新田見 孝さん
市田 紗世さん	今村 晴香さん
若松 多恵さん	白上 智恵さん
大塚 穂波さん	永井 知行さん
福山かおるさん	荒瀬 耕輔さん
岡田 梨佐さん	安江 悠可さん
幸 宏治さん	奥田 竹子さん
青木 秀光さん	安田明日香さん
西野 千景さん	(4月末日まで)

寄付を頂きました

中村 隆一さん	遠山 陽子さん
山田 英子さん	川島 恵子さん
佐藤 希恵さん	米澤 春枝さん

お詫びと訂正

通信 No.128 に下記の誤りがありました。訂正しお詫びいたします。

1p タイトル(漏れ)

誤 発達保障論誕生 50 年第 1 回
正 発達保障論誕生 50 年連続学
習会第 1 回

p5 左下から 1 行目

誤 坂本さん
正 坂元さん

原稿を募集しています!

人間発達研究所通信への投稿

字数: 1200 字 ~ 7500 字まで

期日: 8 月 20 日 (9 月発行分)

投稿ご希望の場合は、人間発達研究所までお知らせ下さい。匿名希望の場合は、その旨お知らせ下さい。

次次号は 12 月発行です。

メール配信への切り替えを募集中

メール配信への切り替え (PDF ファイルでの受取) にご協力頂ける方は、人間発達研究所までメールでお知らせ下さい。

編集後記



今号はいかがでしたか?

5 月 21 日は大津を含む近畿南部でも金環日食が見えました。広大な宇宙にしばし思いを馳せました。さて、総会・研究集会 (6 月 17 日) が近づいています。是非、ご意見をお寄せ下さい。(N.S)

人間発達研究所

〒520-0052 滋賀県大津市朝日が丘
1-4-39 梅田ビル 3 階

TEL/FAX 077-524-9387

E-mail j-ih63su@j-ihd.com

URL <http://www.j-ihd.com/>

年会費 5,000 円

振込口座 (郵便) 01010-7-32709

加入者名 人間発達研究所

学生の会費割戻しはお問い合わせ下さい。